

## 1. 人形作家 高橋まゆみ講演会 「人形とすばらしき人生～」講演

### 「人形作家 高橋まゆみ講演会 ～人形とすばらしき人生～」講演記録

日時：平成25年11月23日(土)

14:00～15:30

会場：生涯学習総合センター10階  
多目的ホール

主催：さいたま市文化施設建設準備室

【講演】人形作家 高橋 まゆみ 氏

司会者 大槻りこ氏

#### ◇主催者あいさつ（さいたま市 清水市長）

さいたま市では、人形文化の振興を標榜し、まちづくりを進めています。人形文化はさいたま市にとって貴重な文化資源であり、この文化を大切にしていきたいと思っています。

人形の文化は、美術や歴史的な視点とともに、親子、家族の絆を表現した「心の文化」であると考えています。特に、岩槻は節句人形の産地で、節句人形は、親、祖父母が子、孫の健やかな生育を祈るものであり、家族の絆、人と人の絆を再認識できるものです。



現在、さいたま市では岩槻区で人形会館の整備をすすめています。今回の講演会は、募集後1日で応募者が定員に達しました。それだけ皆さんが高橋さんのお話に期待していることがわかります。

一昨年9月に「高橋まゆみ人形館」を訪れ、ご案内いただきましたが、非常に感動いたしました。それほど広いスペースではありませんが、昔から日本人が持っている表情や感情が表現され、心が癒される人形が展示されていました。おじいちゃんとおばあちゃんが寄り添った人形など、「高橋まゆみ人形館」に展示されている人形は、懐かしい農村のほのぼのとした家族愛を暮らしの中で再現しており、人形の持つ力の奥深さに、深い感銘をうけました。

今年3月3日には、「高橋まゆみ人形館」を核としたまちづくりをテーマに「市民会館うらわ」で、「地域とともに生きる人形館 ～高橋まゆみ人形館の夢」と題して、講演会を支配人の井田さんをお願いしました。

今回は、高橋まゆみさん本人に、なぜ、大勢の人々を引きつける、あのよう魅力的で感動的な人形を作れるのか、直接お話しをいただくことにより、その全容を理解できるものと考え、自らお願いしたものです。是非、最後までお聞きいただき、人形文化の素晴らしさを再認識してほしいと思います。

## ◇5分程の高橋まゆみさんを紹介するVTRを上映

### ◇高橋まゆみ人形館を訪れた方々のメッセージ

・「私は開業医の事務をしています。病院に来るじいちゃん、ばあちゃんは、みんな高橋さんの作品に出てくる人たちばかりです。この辺に住むじいちゃん、ばあちゃんは土や太陽、風の匂いがする人たちばかり。シャネルやディオールや、そんなの知らなくてもイチゴの花の色はどんなにかわいいか、ナスの花の色はどんなに素敵か知っているんですよね。そんなじいちゃん、ばあちゃんに囲まれて仕事ができる私は幸せ者だと感じました。「子供を叱るな来た道だ。老人笑うな行く道だ」人間として原点を感じさせて頂いた作品たち。これからもお天とうさまの香りのする人形を作ってください。」



- ・「山からのかごを背負ったばあちゃん、100歳と8か月で死んだ母を思いました。辛抱強い母でした。愚痴を言わない母でした。母に会いたくなりました。節くれた母の手に、触れたいくなりました。」
- ・「飯山。雪解けの春。福寿草群生地看板を見て、吸い寄せられていったものの、雪にはまって動けなくなりました。JAFが来るのを一時間程待つ間、林や畑の中から心配して10人近い村人達が来てくれ、お茶までご馳走になりました。忘れられない思い出です。あの里山の忘れられないあたたかい出来事。作者のいらっしゃる所なのですね。“身近に感じる”のは、制作される時に意識なさっていることなのでしょうか？」

### ◇高橋まゆみさん講演会（司会者大槻りこ）

#### 【飯山市と高橋まゆみ人形館について】

- ・最近着付けをしていてやっと着られるようになり、本日は長野県の最北にあたる飯山市から和服で来ました。普段は割烹着で制作にあたっています。
- ・長野市生まれで、長野市は今ビル化が進んでいます。31年前結婚、5年後長野市から夫の実家飯山市に移りました。



・飯山市は、人口約 25,000 人の自然豊かな小さな村。周辺は農家ばかりで、自分たちが子供の頃見てきた懐かしい風景。飯山市は耕作放棄地や空き家があります。自宅はアスパラ農家で冬支度の頃、野沢菜、大根等を漬けています。

・飯山市内にある「高橋まゆみ人形館」も、4月で3周年を迎え、今年7月、50万人目の来館者セレモニーもありました。現在は55万人になりました。来館者は皆人形に逢いたさゆえに来館されています。

・本日会場に持ってきた人形は、ある時目の前を両親と手をつないだ子供が和気あいあいと歩いており、それを表現した「お手々つないで」で、新作です。

・人形館には、人形が320~330体あります。展示スペースが狭いので100体飾れば良いくらいです。新作ができると、お披露目のため入れ替えをしています。



### 【今に至るまでの経緯】

・31年前に結婚しましたが、それまでは人形づくりには興味はありませんでした。それが紙粘土人形に出会い、ロマンドールを作り始めました。

・日本創作人形学院通信教育で人形作りの基礎を学び、試行錯誤を重ね現在の創作人形にたどり着きましたが、それまで人形作りの経験はありませんでした。まさか人形作家になるとは思っていませんでした。

・最初は、かわいらしい人形は好きではなく、河童、カエル、トンボなどを擬人化もの、架空のものを作っていました。

・特に絵本の中から出てくる、この世にないもの（妖精や童話の世界）を作るのが楽しかったです。絵本などで人形の題材を見たり、集めたりしていました。

・近くに先生がないので、どうしても自己流にならざるを得ませんでした。通信教育でいろいろな宿題が出るので、それをこなしていきました。できないと悔しいので、また挑戦しました。1つ1つ克服していくことでのめり込んでいきました。

- ・高橋家は、4世代の大家族で、(まゆみさんが3世代目)兼業農家です。はじめは内職やパート勤めをしていました。そのうち人形の収入がパート収入ぐらいになったので、人形を仕事にしたいと家族に宣言しました。
- ・家の中での人形作りはあまり近所で理解されず、人形の仕事が無い時など、もやもやしていました。それでも、創作人形という一生付き合えるものに出会ったと感じていました。
- ・最初は、他の作家やアーティストの人形を見て歩き、その中に自分の好きな人形がありました。それは布の芸術でした。粘土だけだと、壊れやすく、質感や温かさも出ません。布を使うことで、壊れにくくなりますし、温かみや肌の質感が出ます。
- ・飯山市に移って、大家族の中で、おじいちゃんやおばあちゃんの素朴で愛着がある姿を目の当たりにし、こんな近くにいい題材があったことに気づきました。
- ・そこでおばあちゃんの人形を一体作ってみると、「そんなにいらいらするな」とか諭してくれるようで、いつの間にか「自分の気持ちを穏やかにする」ために作っていました。



### 【人形づくりの工程】

- ・作業場は6畳の部屋です。デザイン画はありません。刺激のある人に出会うと、頭の中に記憶されます。デッサンもしません。
- ・人形を立たせるのに、軽くする必要があります。頭は丸い発泡スチロールに粘土をかぶせます。顔と手足を粘土で作ります。モデルになる人に会うと、そのイメージで作ります。皺を含めリアルな表情にするため、しっかりと粘土で顔を作ります。体はアルミの針金にキルトなどの布をはっていきます。
- ・粘土は普通に手に入る粘土を使用します。配合も何もしません。
- ・裁縫は得意でなかったのが、最初は手が傷だらけになるなどさんざん苦労しました。
- ・テーブル、食べ物、タンスなどの小道具は、人形を通して出会った人に作ってもらっています。相手もプロではありませんが、いろいろと挑戦してくれて、いい刺激を受けています。

→こんな物作ったけど人形を造れるか・・・

- ・人形はもちろんですが、布を見てほしいと思います。着物の材料は、リサイクルショップで古着を買ってきます。緋などは、田舎の蔵から行李ごと譲ってもらいます(洗いざらしのなんとも言えない風合いがあります)。新しい布はほとんど使いません。
- ・弟子はいません。すべて一人で創作し、メンテナンスしています。
- ・飯山市には、まだまだ人形の題材になる懐かしい姿が残っています。
- ・人形を作りだしてから、いつも人間ウォッチングをしています。どうしてもお年寄りに目がいきます。見える範囲だけでない心の世界、なくしてはいけないもの(亀の

甲やおじいちゃんの膝の中の孫など)、伝え続けられない風景や人間愛(祖父母と孫など)など、残さなければいけないものを残す使命感みたいなものがあります。

### 【影響を受けた人】

#### ① 親

・「母の手」は自分と母親がモデルです。泣き寝入りした娘(自分)を半身不随になった体で撫でていきます(寝たきりの母がしっかりと母親の役割を果たしています)。

・不自由な体の母に、人形館ができて一年経った休館日にやっと来てもらえました(たった一人の観覧日)

・観覧する人の多くは、人形を自分の母にだぶらせ、家族を重ねて見ているようで、これは人形の方だと思います。

・人形館の「自分の親に会いに来る」「感動をいっぱいもらえる」という感想ノートのメッセージを見ると、いい仕事をさせていただいていると思います。



#### ② 『八重子のハミング』の著者の陽信孝(みなみのぶたか)氏

・たまたま本屋で見た、アルツハイマーを患った妻の命の閉じるまでを、介護者として克明に綴った『八重子のハミング』(陽信孝著)の中の写真に感動し、「まなざし」「一緒に帰ろう」「ハーモニー」「雪の中」という人形を作りました。

・この『八重子のハミング』という本に出会わなかったら、精神世界に触れる(人の気持ちを吐き出させてくれる)人形は作れなかったと思います。

・高橋さんが出演した「徹子の部屋」を見た陽さんの友人の紹介で、実際に陽さんと会い、「まなざし」をプレゼント、陽さんはその人形を見て涙がとまらなくなったそうです。

・その後、高橋さんと陽さんは飲み友達になり、今では80歳近い陽さんが高橋さんの人形の追っかけになっています。

### 【人形への想い】

・一番力を入れるのは顔です。顔ができれば、体はついてきます。瞳の中に白い絵の具を入れると、光り輝いて語りかけてくるのです。

・実際のおじいさんやおばあさんを見て、田舎の衣装(重ね着や着ぶくれ)は素朴でかわいいと思います。田舎にいと、四季折々で着るものが違います。それで季節感を表現しています。

・田舎ならではの顔つきと体つきは、土仕事(お百姓)をしないと、あの背中の丸みにはなりません。100歳を超えたおばあちゃんが、毎日家の周りの草取りをしています。「働くことは生きること」と人生観を教えてください。

・おじいさんのイメージは自分の父です。酒が好き（ほとんど一人酒）で無口で不器用。酒を飲むとわがままになるというのが男のイメージです。自分のイメージが作品に出ることはしばしばあります。

・常設館ができてリピーターが来てくれます。来館者を飽きさせないことが大事です。家族の来館者が多く、家族孝行ができる場になっています。

・人形はトータルで見てほしいと思います。人形本体だけでなく、布や言葉もセットで見てもらいたいです。

### 【今後の目標】

・今大体 300 体の人形があります。もっともっと増やしていきたいです。

・やなせたかし氏が「90 歳からどんどん新しいものが出来てくる」と言っていました。自分も、90 歳になっても 100 歳になっても人形を作っていきたいと思っています。

・創作人形は伝統ではありませんが、「人形」を残すというより、「想い」を残していきたいと考えています。

・人形館の運営は信州いいやま観光局がやってくれていて、自分をつくるだけでよい（非常に助かっています）のですが、再来年、飯山に新幹線が来るので、飯山市の立ち寄りどころとして花が開いてくれればと思います。

### ◇質疑

Q：私は岩槻の木目込み人形の職人です。先日高橋まゆみ人形館にうかがいました。高橋さんの人形は味わい深い、人に感動を与える人形だと思います。自分の作る人形は、子供が健やかに育つことを願って、表現力はあまり重視しません。職人の技、技術重視で頑張っています。お聞きしたいのは、①高橋さんにとって人形とは何ですか、



②特に気をつけていることは何ですか(自分の気をつけていることは「妻や友人と喧嘩をしないこと」)の2つです。

A：伝統工芸品と創作人形では、歩みだしたところが違います。創作人形は自由で決まりがありません。心の世界＝「想い」が一番大切です。自分が感動しないと、作っても人に感動を与えられません。身近にある

ほのぼのとした姿を残していきたいし、大事にしたいと思っています。人が元気になる人形を作っていきたいです。

Q：岩槻から来ました。先日人形館にうかがって、大変感動しました。個々の人形に込めた高橋さんの世の中に対するメッセージを聞かせてください。

A：そんなに深く考えて作ってはいません。感想ノートに来館者の皆様のメッセージが書かれています。それを読むと、自分の中にこんなに力があつたのかと不思議な思いがします。このまま作り続けていければと考えています。岩槻から伝統工芸の職人さんも観に来ていただいて光栄に思います。それぞれの役割を全うできればと思います。



Q：浦和から来ました。人形の顔を見ると、皆斜め上を見上げているように思います。作るのにどれくらいの期間がかかるのですか。また季節感をどう出すのでしょうか。

A：時間は決まっていません。気持ちで作るところが多分にあります。気が乗っている時は頑張ってしまうし、乗れないときもあります。粘土を乾かす時間もかかるし、草鞋など作り方の資料集めから始めることもあります。

季節感は、着るもので出します。駅に飾っている人形も、季節ごとに、着るもので季節感を出しています。餅つき、豆まきなど催事的な人形も作ってみたいです。

Q：人形館にうかがいました。すばらしい作品ばかりでした。「頑固ばあさんの家出」は、家に戻って、お嫁さんと仲直りさせてほしいです。

A：「頑固ばあさんの家出」は人気のある作品です。今後「欲張りじいさん」を作りたいです。今はお嫁さんが強くなりました。頑固で頑張っているばあさんが作りたかったのです。仲直りは考えてみたいです。



Q：高橋さんの次回の展示会のスケジュールを教えてください。縫物を教えてもらっている91歳の母に、高橋さんの人形を見せたいです。

A：埼玉で一番多く（4回）展示会を実施しています。最近は常設の人形館ができたので、飯山に来る人が多いです。以前のように外に人形を出すと、人形館に人形がいなくなってしまう。展示会

のスケジュールは人形館のHPかメルマガを見てください。

Q：八重子さんが履物をたがいちがいにはいているのが印象的でした。これからも認知症のおじいちゃん、おばあちゃんを作ってください。介護している人の励みにもなります。

A：認知症の人形を作ったときは、作っていいのか考えましたが、「その人の人生を否定しない」「かわいい無垢な笑顔などが表現できる」などと考えて作りました。介護してきた人に感動を与えられる人形をこれからも作ってみたいです。